

狡くて甘い偽装婚約

大好きな人がいる——
けれど、彼が私を好きになることはない。
絶対に。

プロローグ

湿気を含んだ風が肌を撫でる。

昔ながらの喫茶店や、居酒屋が多い駅近くの商店街から一本裏道に入ると、立派な洋風の家が多く建ち並んでいる。

もう二十時を過ぎたこの時間では、ほとんど人通りはない。時折、犬の散歩をしている人や車が通るくらいだった。

「やめてほしいならやめるよ」

民家の前で立ち止まった彼が、私の耳元で囁いた。私はここが外であることも忘れて、彼の言葉に聞き入ってしまう。

いつでも逃げられる力で私を抱きしめてくる彼は、私の答えをわかっているはずだ。本当に狡い。そう思うのに。

「やめてほしいわけない」

好きで好きでどうしようもなく、抱きしめてくる腕を振り解けない。

彼の広い胸板にぐりぐりと額を擦りつけると、頭上から宥めるような甘い声が降ってきた。

「泣いてる？」

「言ったでしょ……抱きしめられたら泣いちゃうぐらい好きって」

私の涙に絆されてくれればいいのに。

仕方ないな——そう言っ、私を好きになっ、くれればいいのに。

けれど、わかってしまった。

彼が、決して叶わない恋をしていること。

それが簡単に諦められるものではないことも。

私の恋は上手くいかない。だから、涙を彼のシャツで拭くくらいは許してほしい。

彼はそれきり言葉なく私を抱きしめ続けてくれた。

けれど、もしかしたら彼は今、私をどうやって振ろうかと考えているのかもしれない。

そう思ったら、堪らなく怖くなった。

そんなにすぐ答えを出さないで。

私に恋を諦めろと言わないで。

「今、なに考えてるの？」

焦れて問いかけたのは私のほうだ。

「やっぱり、俺って最低だなんて思っ、」

「どうして？」

「あいつを忘れられないのに、今……キスしたいって思っ、」

私の心は歓喜に沸いた。欲しがってくれるのなら、身体だけだっ、構わない。

彼女を忘れてなんて言わない。

隙あらば奪いたいとか、そんなんじゃない。

今は私の、顔が好きじゃなくても、性格が好きじゃなくてもいい。ただ、彼の心の中のほんの片

隅にでも、私の存在がぼつりと染みになっ、残ればと思っ、

顔を上げて見た彼の目は、驚くほど劣情を孕んでいた。

普段見せる柔和な笑みはかけらほどもなく、茶色がかっ、瞳は熱っぽく潤んでいる。見たこと

ない男の顔をしていた。

「私のこと、少しは可愛いと思っ、」

「可愛いつて思っ、。だから、困っ、」

「キス、していいよ？」

「傷つ、」

「嘘。もうその気になっ、」

爪先で立ち彼の首に腕を回すと、瞬く間に唇が重なった。ちゅつと水音が立つたびにキスは深さを増していく。

「んっ……はあ……っ」

頬裏を硬い舌尖になぞられる。

溢れる唾液を吸われて、唇の周りが濡れるのも構わずに角度を変えながら甘い口づけは続いた。彼の背中に手を回すと、より強く抱きしめ返された。こんな風に男性に抱きしめられるのは初めてじゃないのに。

彼どのキスは頭が朦朧とするほど心地よく、人には言えないあらゆる場所までもが切なく疼いてしまふ。

「ん、ん……」

自分のものとは思えない艶めかしい声ばかりが、唇の隙間から漏れた。

この人が欲しくて堪らない。

どうして彼は私のものではないのだろう——

唇を離されそうになって、私は誘うように彼の唇を舌で舐めた。

「煽り方が上手過ぎるんだよ」

ぐつと腰が近づき、昂った彼の欲望を押しあてられた。

彼が私の身体に興奮してくれているのなら、こんなにも嬉しいことはない。

太腿を擦りあわせると、下肢にあたる彼の膨らみが揺れ動かされる。

「あつ、やつ……ああん」

恥ずかしくて堪らないのに、無意識に腰をくねらせてより気持ちいい場所を探ってしまう。

「ごめんね。最低な男で……嫌いになってもいいから」

「ひどい。嫌いになんてなれないって……知ってるくせに」

「うん。最低だってわかってるけど、俺をもう少し好きでいて」

あなたが好きでいていいと言うなら。

私は都合のいい女になる。

だからお願い。いつかは、私を一番にしてほしい。

「……なにされてもいい。それぐらい好きだから」

彼の背中に回した手に力を込める。抱きしめ返されたことに安堵し、彼と過ごす夜が始まった。

一 なにも知らうとしないのは不幸である

太陽は高く昇り、時折吹く風が色とりどりに咲いた椿の五弁花を揺らしていた。

風はまだ冷たさを残すものの、走っていると額はじつとりと汗ばんでくる。

私——山下みのは息を切らし、美しく剪定された病院の庭に目を向けることもなく、空調の効いた院内へと入った。

肩まで伸びた黒髪は走ったせいで乱れていたが、汗に濡れて紅潮した頬は、一定の温度に保たれた空調のおかげで白さを取り戻している。

白を基調とした清潔感のある建物は、一階受付に人が溢れかえっていた。私が暮らす街で大きい病院といえは、ここ長谷川総合病院だけだ。小さい頃は小児科でお世話になり、高校からは年に一度あるかないかの頻度で内科にお世話になっている。

社会人になっても、風邪も引かない私がここに来ることは滅多になく、今日も特別具合が悪いわけではない。大事な家族が入院したと聞かされたためだ。

さすがに院内を走るわけにはいかず、早歩きで目的地をめざすが、エレベーターを待つ時間すら惜しかった。それほど気が急いでいた。

エレベーターを降り、あらかじめ聞いていた病室のドアをノックもなしに開けると、しわくちゃで骨張った手を弱々しく振る、大好きな祖父の姿があった。

（おじい……ちゃん……？）

ベッドに横たわるおじいちゃんの姿は、私の記憶の中の姿とはまったく違っていった。

本人であるのは間違いないのに、触れたら壊れてしまいそうで私は足を進めるのを一瞬躊躇してしまふ。

上げた手が今にも重力に負けて落ちてしまいそうなほど、身体は細く衰弱しているように見えた。酸素マスクから聞こえる呼吸音はひどく弱々しい。

「おじいちゃんっ！」

私はベッドに駆け寄ると、おじいちゃんの身体に縋りついた。骨と皮だけになった手を両手で握ると涙が溢れでる。

「おお……みのり、来たか」

今まで風邪ひとつ引いたことのない健康なおじいちゃんは、いつでも矍鑠としていた。八十を過ぎてても年齢を感じさせず、階段の上り下りすら楽にこなしていたのに。

もつと頻繁に会っていればよかつたと、こんな時になつて後悔してしまふ。

「具合はっ？ 倒れたつて大丈夫なのっ？」

私が駆け寄ると、おじいちゃんは力なく笑いながらも、細くなった指をギュツと握って拳を作った。

付き添っていたお母さんが、私のために椅子を用意してくれた。

「みのり、ちよつと落ち着きなさい。おじいちゃん、苦しくなつちゃうから」

「大丈夫だ。みのりの顔を見たら……元気がでたよ。今死んだら、お前の花嫁姿が見られないからなあ。たしか……付きあつてる人が、いたんじゃなかつたかい？」

酸素マスク越しの会話は聞き取りにくい。

耳を近づけて、一言一言、言葉の意味を理解する。おじいちゃんの苦しそうな呼吸を聞いていると、家族なのにその場から逃げだしたくなってしまう。

大好きな人が苦しんでいる様は、あまりにも辛かった。

もしかしたらあまり長く生きられないのではないだろうか。そんな最悪の想像が脳裏を過る。

「う、うん」

「最近、話を聞かないけど……彼氏とは仲良くしてるか？ 一度顔を見たいって……前から、言ってるじゃないか」

「いや、今は私の話してる場合じゃないでしょ。倒れたって聞いたからどれだけ重い病気なのかって、私はそっちを心配してるのっ！」

こんな風に誤魔化したくなんてなかった。

(でも……彼氏なんて、本当はいないし……)

おじいちゃんが、仕事以外では引きこもってばかりの私を心配してくれているのは知っている。

「最近どうだ」と聞かれるたびに、変化のない自分が情けなかった。

だからつい苦し紛れの嘘をついてしまった。

結婚を前提に付きあっている人がいると。

けれど、今度は嘘をついた心苦しさから会いに行けなくなってしまうた。彼のことを聞かれたらどうしようとうしろめたく、私は自分のことではいっばいっばいだった。

前に会ったのはもう一年前だ。いつたい、いつから具合が悪かったのだろう。

私が以前のようにおじいちゃんに会いに行っていたら、倒れたりする前に気づけたのではないだろうか。

「じいちゃんの心配は、いらないよ。いつ死んでも……おかしくない年齢だ。でも……みのりは苦しいことがあっても、我慢ばかりだから、心配なんだ。頼む……」

「う……あ、あの……忙しい人で、なかなか」

「結婚しろ……とは、言わない。じいちゃん……結婚式に、間にあうかどうかともわからんからな。

じゃから……彼氏と、お前のドレス姿だけでも……見せてはもらえんか？ みのりが幸せそうにしていたら、じいちゃんも安心して死ねる」

おじいちゃんの願いは叶えてあげたい——でも、どうしたって無理だ。

私はもう他人を信じることができない。友人も恋人もいらぬ。

「そんなこと言わないで……長生きしてよ……私が、彼と結婚するまで」

私はまた嘘をついた。

結婚なんて絶対にしない。

でも、病気で心身ともに弱くなっているおじいちゃんに本心を告げる気にはなれなかった。

(おじいちゃん……ごめんなさい、ごめんなさい)

私はおじいちゃんの手を握りながら、心の中で謝罪を繰り返した。こんなに細かっただろうかと手が震えそうになる。

記憶の中にあるおじいちゃんは恰幅がよくて、ぼつと見ても健康そうだった。ほんの一年会っていなかったただけなのに、どうして。

(風邪をこじらせたってお母さんは言ってたけど、本当にそれだけなの？)

「もっと、たくさん……話をしたかったなあ。お前は、とても、泣き虫で強がりだから。今……幸せなら、いいんだが……ゲホッ、ゲホッ……」

「お父さんっ！　みのり、話すのはまたにしましょう。おじいちゃん苦しそうだから……少し寝かせてあげて」

苦しそうに身体を丸めるおじいちゃんの背中を摩こするお母さんに、もう話は終わりだと告げられた。「そんなに……そんなに具合悪いの？　風邪こじらせたただけだから、すぐ退院できるって言ってたじゃない！」

なにもできない歯がゆさから、ついお母さんを責めるように言ってしまった。
ほかに怒りを抑える方法がなかった。最低だ。

おじいちゃんが病気になったのはお母さんのせいじゃない。お母さんからしてみれば自分の父親だ。心配に決まっているのに。

私の肩をポンと慰なぐさめるように叩いて、お母さんは廊下に出た。視線で私に外へ出なさいと言ってくる。

苦しげに呼吸を繰り返すおじいちゃんは、薬が効いているのかうつらうつらし始めた。やがて寝息のような呼吸音が変わったことに安堵あんどの息が漏れる。

私はお母さんの後を追って病室の外へ出た。
家族団らん室と書かれたオープンスペースに腰を下ろして、お母さんの言葉を待つ。唾を呑み込む音が、やたらと大きく響いた。

「みのり、あなたを傷つけたくなかったの。おじいちゃんが黙っておけって言ったから知らせなかったんだけどね。もう、そう長くは生きられないって。手術で延命する方法もないわけじゃない

けど、おじいちゃんが望まなかったの」

「嘘……」

舌がこわばり上手く口が回らなかった。

乾いて掠すれた声が空気を震わせる。

息を吸い込むとひゅつと音がして、半身を失ったような痛み打ちのめされた。

人間いつかは死ぬのだとわかっていても、私は今まで身近な人の死に触れたことがない。おじいちゃんがもうすぐいなくなってしまう。その事実が受け止められない。

「嘘じゃない。あなたは、仕事以外ではゲームしてるか、おじいちゃんと話すぐらいしか楽しみがないって知ってたから。おじいちゃんはそのことをずいぶんと気に病んでるの。ねえ、さっきの彼氏の話、嘘でしょう？　変に期待させても可哀想だから、嘘なら早めにおじいちゃんに謝りなさい」

お母さんは胡乱うろんな目を私に向けながら言った。

家から数キロ離れた場所で一人暮らしをしているおじいちゃんならまだしも、一緒に暮らしている家族に嘘が通用しないのは当然だ。

土曜日も日曜日も朝から晩まで部屋でゴロゴロしている独身女に恋人ができたなど、家族が信じるはずがなかった。

でも、お母さんに頭ごなしに否定されるのは悔しい。

私は会社でも浮いている。同僚はなにも言ってはこないが、きつとコミュ障だのポッチだのと噂

されているに違いない。

他人の評価など気にしないように努めてきたが、家族にだけは言われたくなかった。

かといって恋人を作る気などさらさらない。

意地になつてゐる部分もあったが、もう嘘を本当だと偽るしかなかった。

「嘘じゃないっ！　じゃあ彼に聞いてみる。おじいちゃんが喜ぶなら、ドレスぐらいいくらでも着るから……」

後悔先に立たず。

自分で自分の首を絞めているのはわかつていた。お母さんは私の話をまだ信じていない。謝るなら今しかない。

けれど、私のおかしなプライドが邪魔をした。どうにか嘘を本当にする方法はないか。

ドレスを着ると言つても一人ではだめだ。「ほら、やつぱり嘘だったのね」と言われるのがオチで、おじいちゃんを余計に心配させてしまうことになりかねない。

彼氏のふりをしておじいちゃんに会つてくれる知りあい——いるはずもない。

しかし、最近は結婚式に友人として参列してくれる、友人代行サービスなどもある。結婚相手そのものだって、頼める先があるかも。

いざとなつたらプロに頼むしかない。嘘を突き通すなら方法はそれぐらいだ。

おじいちゃんがそれで安心してくれるなら。

騙すなんて胸が痛むけど、もう後には引けない。

——あの話を知っているのは、家族の中でおじいちゃんだけだ。

けれど、病に臥せるおじいちゃんに、いまだ私が過去のトラウマから抜けだせていないとは、とても言えなかつた。

二 偽りの婚約者と私に訪れる変化の前触れ

「彼にずっと一緒にいようねって言われたんですよお」

会社の狭いロッカールーム内で、きゃっきゃと楽しそうな甲高い声が癪に障る。

若いわねくなんて達観できるほど私と彼女の歳は離れていない。

早くこの場から逃げだしたい一心で、私は制服のタイトスカートを脱ぐと、シワになるのも構わずにロッカーへと投げ入れた。

「なにになにつ？　えもつちゃん、ついにつ結婚？」

「そういうんじゃないんですけど、お揃いの指輪……もらっちゃいましたっ！」

囁き立てる周りも周りだが、キラキラと目を輝かせながら指輪を周囲へ見せびらかす後輩に、芸人かよと突つ込みたい気分をなんとか抑え込んだ。

彼女に恨みはないが、私は耳を塞ぎたい思いでロッカーのドアをそっと閉め、その場を後にした。履き慣れた地味な黒のパンプスに、量販店で買ったお洒落させ口のスーツ。ついでに言えば、百

円均一で買ったゴムで肩までの黒髪を一つに結ぶヘアスタイルは、やる気も色気もない。

足取りが重いのは、仕事に疲れたからではない。

他人の恋愛話にうんざりする。そんな風にしか考えられない自分にもだ。

短大を卒業したあと銀行に就職し八年が経った。気づけば二十八歳。

真面目でお堅い仕事だと思われがちだが、仕事を離れてしまえば行員として普通のOLと変わらない。

指輪を見せびらかしていた後輩の江本さんは恋愛話が好きで、毎日ロッカールームで彼氏とどうしたこうしたという話を延々と語り続けているし、一年先輩の相田さんと飯田さんは、毎週のように飲み会の報告会をしている。

女性だけではなく、涉外係の男性も週末の夜はよく合コンをしているようで、実は社内結婚も少なくはない。

しかし、私はといえば——ロッカールームで同僚の話盗み聞きしているだけで、金曜日の夜だというのに、仕事終わりに「飲みに行こう」と誘われることもなければ、私の「お先に失礼します」を聞いてくれる人もいない。

会社帰りに寄る場所といえば、本屋かアニメ、ゲーム関係の店ばかり。あとはたまに行きつけの居酒屋へ一人で飲みに行くくらい。

寂しいとか、人恋しいという感情は趣味が紛らわしてくれる。

もう八年近く、ポツチの生活をしていた。

仕事が早く終わり、繁華街へと流れていく人々の群れを、私は冷めた気持ちで眺めていた。みんな一様になにかから解放された顔をしていて楽しそうだ。

私には縁のない世界。
いや、違う。

後輩の言葉も、昔の私ならば素直に頷けていただろう。

恋愛話だっておしゃれだって好きだった。清楚に見えるように爪の手入れも欠かさなかったし、彼の好みに合わせた洋服選びも私にとっては重要だった。

好きでいてくれると思っていた。

あの頃の私には彼がすべてだった。
けれど。

ずっと一緒にいようね——そんな約束、なんの意味もなかった。

恋愛している人が羨ましくなんてない、そう言い聞かせていても、胸を焼き尽くすような羨望の思いは消えてくれない。

「とりあえず、着替えて飲みに行こう」

ため息を無理やり呑み込む。

鬱々とした気分が家に帰り、ベッドの上に乱雑に放置されたままのティーシャツとジャージを手にとった。
中に着るティーシャツは、ダサイことこの上ない。シツシツと、ニヒルに笑う犬が描いてある

お気に入り一枚だ。

部屋で過ごす時も、近所にある居酒屋へ飲みに行く時も、私はだいたい同じ格好だ。

紺色に白い線の入ったジャージは、一応はメジャーなスポーツ用品店で買ったけれど、もう八年も着続けているせいで生地はヨレヨレで毛玉だらけだ。

むしろ上下で一万円のジャージが、まあよく八年も持ったものだ。着心地も最高だし。

しかし、完全に女は捨てている。

そんなの誰に言われなくとも、私が一番わかっている。

むしろ誰にも、私を女として見てほしくはなかった。

家から歩いて数分の場所にある、駅前の小さな和風居酒屋の暖簾をくぐると、いつもと同じスタツフが毎度お馴染みの声を上げた。

「いらつしやうい！ お一人様、カウンター席ごあんない！」

「生一つと、焼き鳥の盛り合わせタレください」

「はい、喜んで〜！」

そんな大きな声で、“お一人様”だなんてと、恥ずかしく思う気持ちはすでない。まあ八年も常連だと阿吽の呼吸とでも言おうか。あり得ないが、私が誰かと二人でこの店の暖簾をくぐれば、いつものスタツフはぼかんと口を開けて固まるんじゃないだろうか。

そんな妄想に苦笑しつつ、いつもの定位置であるカウンター席に腰かけた。

会社帰りに来ることもあるが、スーツ姿がどうにも落ち着かず、一度家に着替えに戻ってからま

た飲みに来ることが多い。

「……………どうしようかなあ」

私は運ばれてきたビールをグイッとジョッキの半分まで飲み干すと、深くため息をついた。

店員とは顔馴染みだが、特別親しげに話しかけてくることもない。一人でも通いやすい雰囲気この店は、なくてはならない私の憩いの場だ。

病院から電話があったのは一昨日。偶然仕事が休みの水曜日だった。

それから木曜、金曜と問題を先延ばしにしていたが、おじいちゃんの状態は日に日に悪くなっていくらしく、もう自分でもどうしていいかわからなくなってしまった。

(正直に言う……………？ でも……………)

酒を飲んでいる場合じゃない。考えないといけないとわかっているけど、つい現実逃避をしてしまっ

まう。趣味のゲームに没頭し、こうして飲みに来て、おじいちゃんが死ぬはずはないと思いつくことで、現実から逃げている。

ストレス発散の方法が家でゲームか、一人飲みなのだから、お母さんが呆れるのも、おじいちゃん

んが心配するのも当然だ。

「あーあ、どっかに結婚相手落ちてないかなあ」
ジョッキに残ったビールをすべて飲み干して、カウンター越しにお代わりと声をかけると、隣に座っていた男性客の声が聞こえてきた。

「結婚相手探してるの？ 奇遇だな。俺もなんだ」

別の客と話しているのだろうと思っていたが、会話の内容からしてそうではなさそうだ。関わりたくはなかったが、相手をせずに変に絡まれても困る。

どうするべきかと、チラリと横目で相手を盗み見た。ちよつと——いや、かなり、驚いた。

日本語を話していなければ外国人だと思っただろう。色素の薄い茶色い髪に、髪と同じ色の瞳が強烈な印象を残す、目鼻立ちの整った顔をしていた。肌理の整った白い肌はシミやホクロ一つない。少し顔を伏せるだけで、切れ長の目元が長いまつ毛に覆い隠されてしまう。

男の人に対して失礼かもしれないが——綺麗な顔としか言いようがなかった。顔は芸能人のように小さく、長い足がカウンターからはみ出していて、彼の背の高さも窺える。

体格を見た限り、身長は私と頭一つ分は違うはずだ。それなのに座高が私とそう変わらないなんて解せない、どういうことだ。

（へえ、現実にいるんだ……こういう人）

大衆居酒屋がまったく似合わないなんて。

黒塗りの高級車に、高級料亭、磨き上げられたシャンパングラスを傾けたりなんかして……ふふふ。漫画だと背景に薔薇が描かれるはず。私は思わず妄想の世界にトリップしかけて首を振った。

ゲームや、漫画でしか知らない世界、私とは縁遠い世界にいる住人がそのまま現実に出てきてしまった、そんな感じ。

「聞いている？」

「え、あ、聞いているけど」

口を半開きにしたまま美しい男の顔を凝視していると、彼はカウンターに肘をつき私のほうを向いた。

（なんなんだ、これは——）

正面から見ると、破壊力があり過ぎて困ってしまう。

聞いていると言ったものの、いったいなんの話をしたのかは思い出せなかった。

まだそれほど飲んでいないのに、もう酔いが回ってしまったのだろうか。

結婚がどうのと言っていたように思えて、隣に座る彼の言葉を頭の中で反芻する。

「あ、そうだ！ 結婚！」

「そうそう。君、結婚相手探してるんでしょ？」

彼の口調は穏やかで押しつけがましくない。耳心地のいい低音で人懐こくこられると、つい気を許してしまいそうになる。

優しげに細められた目元と弧を描いた唇は、相手の警戒心を解かせるに十分な効果を發揮している。

「うん……あの、どうして知ってるの？」

「そりゃ、この狭い店内に響く大声で、結婚相手落ちてないかな」って言ってたから」

「え、声に出ってた？」

「ああ、どうしようかなあのところからね」

家に一人でいるとつい独り言が多くなる。ここでも癖が出ていたとは。気をつけないと。

彼とは、きつとこの先二度と会うことはないだろうが、隣で聞かれていたと思うと決まりが悪い。

「それは……失礼しました。で、まさかナンパ、とかじゃないよね？」

これだけの美形が大衆居酒屋でナンパをするとも思えなかったが、それなりに動揺していたせいだろう。考えずに口から出てきた言葉がそれだった。

(まさか、結婚相談所の職員とか……?)

それが一番あり得そうだ。「お客様にお勧めのプランがありますが、一度見学にいらっしやいませんか」という話が始まりそうな胡散臭さが彼の笑顔の中にはあった。

つい気を許しそうになる雰囲気も、もしかしたら作られたものではないかと勘繰ってしまふ。

「俺は、長谷川晃史こうしって言います。そっちは？ ナンパじゃないよ。ただ、話してるだけ」

「私は山下みのり……ってそうじゃなくて、私が結婚相手を探してるってこと、あなたには関係ないでしょ？」

いくら結婚相談所の職員でも、ジャージ姿で飲みに来るような女に話しかけるもの好きはいないだろう。

私は典型的な非リア充だ。結婚したいならせめてその格好をどうにかしてください——私がプランナーならばそう言うだろう。

私の勝手な妄想とは裏腹に、彼は一呼吸置いたあと真面目な表情で淡々と告げてきた。

「君が結婚相手落ちてないかと言ったから、気になって声をかけたただけ。実は俺も結婚相手探してるんで」

予想外の話に、どう反応していいやらわからない。

彼の話を信じるなら、とりあえず結婚相談所の営業という線は消えた。

「あなたも？」

「ああ」

失礼かもしれないが、彼はとても結婚したいようには見えなかった。

おそらく、銀行内で相田さんや飯田さんの話を聞いているからだろう。彼女たちはいつも恋に浮かれていて楽しそうだ。けれど、この人は。

あなた、誰かを本気で好きになったことある——？

そう思ってしまうほど「結婚」という言葉を紡ぐ彼からは、恋愛に対しての必死さを感じられなかった。

(ま、私も人のこと言えないけどさ……)

一見穏やかそうに見えるから簡単に懐かたじけなくに入り込めそうな雰囲気があるが、それは上辺だけだろう。

自分のことなのに他人事で、まるで取引を持ちかけられているような、そんな気さえした。

「どうして？」

「家の事情。結婚した兄に、そろそろお前も身を固めろと言われてね。まあ、よくある話だよ」

「え、よくあるもんなの？」

彼は、見た目三十代前半といったところだ。

結婚適齢期だろうが、男兄弟で結婚の話がでるのは珍しいような気がする。

「うちは古い家だね。本家が家と会社を継ぐって決まりがあるんだ。両親はそう堅苦しい人たちではないし、相手をとやかに言われるわけじゃないんだけど、三十過ぎてからは兄嫁も一緒にあって口うるさいのなんの……」

「兄嫁」と言った時だけは、彼から家族への愛情のようなものを感じた。

おそらく嘘ではないのだろう。けれど、どういう理由で私にそんな話をするのかはわからない。

彼の結婚したい理由と私の理由はまるで違う。「わかる、わかる」と同調できるはずもなかった。

それに本家が家を継ぐとは、大企業の御曹司なのだろうか。たしかに大衆居酒屋にいても、彼の風貌からは隠しきれない育ちのよさが滲みでている。

あながち私の妄想は間違っていないかもしれない。お金持ちも色々大変だ。

結婚について興味なさそうに淡々と話しながらも、彼からは時折、両親への尊敬の念が窺えた。

きつと大事に愛されて育ってきたのだろう。

「実家暮らし？ お兄さん夫婦も一緒に暮らしてるの？」

両親と兄夫婦からたびたび結婚を急かされているのなら、うんざりしてしまうのも頷ける。

「そう。まあ、彼らなりに心配してるのはわかるんだ。けど、兄が『相手がいないなら見合いますか、うちのに紹介してもらえ』って言ってきてね。兄嫁まで結託して俺の結婚相手を探す気になっ

てるものだから、つい結婚を前提に付きあっている女性がいると嘘をついた」

どこかで聞いたような話だ。

いや、しかし彼と私では状況がまるで違う。

私には兄妹がいないし、絶対に結婚をしなければならいなんて制約もない。ただ結婚を約束した恋人のふりをして、おじいちゃんに会ってほしいだけだ。

家が絡む話は、正直未知の世界で理解できなかつたが、稀に見るほどのイケメンに声をかけられた理由は、徐々に呑み込めてきた。

「だから結婚相手を探してるのね」

しかし、彼ほどの美形なら結婚相手として名乗りを挙げる女性はたくさんいるだろう。

むしろ家柄まで保証されているとなると、こぞって手を上げる美女たちが多そうだ。

私は結婚自体絶対に御免だが、家を抜きにして彼は結婚についてどう思っているのか。自分の義務だとも思っているのだろうか。

とりあえず先のことは考えず、現状を乗り切るために相手を探しているように感じた。

「しかも会わせろって話が進んでね。仕事を理由にしようにも、家族経営しているから俺の勤務スケジュールなんてバレバレだし、そんな時間はないと嘘をつくこともできない」

「そういう事情なら、とりあえず誰でもいいから連れて行かなきゃってなるね」

「ああ、それに今更嘘だったと言えば兄の思う壺だし。おそらく俺が嘘で言ったことはバレてるっというか、疑ってるからさ」

そこは私と同じだと、思わず笑いがこぼれる。

お母さんも本当に付きあつてる人がいるなら連れて来てみなさいよ、と言わんばかりだ。これで本当のことを言えば「ほら見なさい。くだらない嘘つくくんじやないの」となる。

「でも、大きい家で跡継ぎが必要だつてのはわかるんだけど、お兄さんが結婚してるんだつたら、そこまで急ぐ必要はくない？ どうしてそこまであなたを結婚させたいんだらう？」

男性がここまで結婚を急げと迫られるのは不思議な話だ。

女性ならば三十代間近になると一度や二度や三度、聞く話であるが。

私が聞くと、ほんの少し彼の横顔が翳つたような気がした。淡々と感情を声に出さず話していた彼に、初めて動揺の色が見える。

会ったばかりでよく知りもしないのに、どうしてか私は彼のことが気になって仕方がなかった。誰とも関わりたくないのに、彼のことを知ろうとしている。

自分よりも大変な状況の彼に同情しているのかもしれない。これも一種の現実逃避か。

「さあ……俺にも兄の気持ちはよくわからない。けど、有言実行な男であるのは確かだから、嘘だとバレた途端見合い攻撃が始まるんだらうな」

(誤魔化した……?)

ビールを呷つた彼は、ため息をつきながらやれやれと肩を竦めた。

「それで、ついさつき名前を知つたばかりの私にそんな話をしてきたのはどうして？ まさか私と結婚したいわけじゃないでしょ？」

「そのまさかだよ。君、本心で結婚したいわけじゃないだらう？ 困っているのなら共犯にならないかなって」

私が断らないと自信があるのか。

それとも、たとえ断られたとしても別にいいと思つているのか、彼はまるで「この後もう一杯どう？」とでもいうような軽い口調で言つた。

彼の言う共犯の意味を正確に理解したわけではない。が、共犯というからには彼が提案しているこの結婚に関してなんらかの約束事があるのは明らかだ。

「どうしてわかるの？ 私が本当に結婚したくて、どこかにいい男落ちてないかなあつて探してる女だつたらどうすんの？ あなたみたいなかっこいい男の人はすぐ狙われちゃうよ？」

「今すぐに結婚したい女は、こんなおっさんばかりの大衆居酒屋にこんな時間一人で来ないよ。しかも常連みただし。週末の夜だよ？ そういう女は合コンやら飲み会に精を出すでしょ」

「納得……それに私、恋人探してる女の格好じゃないしね」

我ながら自虐的だ。

けれど彼は、そんなことはないけどねと思つてもいないことを言つた。いくらなんでも、本心じゃないだらう。八年もののジャージだし。

「で、君の事情は聞かせてもらえるの？」

私は会つて間もない彼に、事情を話した。

おじいちゃんの病氣のこと、嘘をついてしまったこと。彼は口を挟むことなく、私の話に耳を傾

けていた。

「……それで、仕事以外では引きこもって、オタクまっしぐらな生活してるってバレたら、おじいちゃん、ますます具合悪くなっちゃう」

「俺たちは、お互いに婚約者を家族に紹介する必要があるってわけだ」

「うん、そうなるかな」

「じゃあ、俺と契約しよう。君に悪いようにはしないから」

「契約？」

「うん、結婚を前提とした恋人“契約だ。もちろんふりでね」

「つまり婚約者ってことよね？ それっていつまで？ あなたに好きな人ができたらどうするの？」

好きな人、ではなくとも恋人の一人や二人はいそうだ。

婚約者となる以上、互いに清廉潔白せいれんけつぱくであるべきだろう。名家なら特に。

もし何年にもわたって彼の婚約者のふりをしなければならぬのなら、面倒なことこの上ない。

華々しい人生を送ってきたであろう彼と、非リアな私ではどう考えても釣りあわない。いくら本当の婚約者でないとはいえ、たびたび顔を合わせて家族にガツカリされるのは御免ごめんだった。

「俺は、一度家族に会ってほしいだけだから、そう時間は取らせないよ。好きな人ができるなんてこともあり得ないから心配しないでいい。そっちこそ、その時はどうする？」

（好きな人ができるなんてあり得ない……？）

大衆居酒屋にいただけでこれだけ周囲の女性の視線を集める男が、いったいなにを言っているの

だろう。

やたらと自信ありげに言われて首を傾げる。

「私も……それは絶対ないから」

二人の間に奇妙な沈黙が訪れた。

触れるな、という空気があり、それは互いに感じ取った。

彼のことはひとまず置いておいて、私に関しては断言できる。

あの日、私はもう二度と誰かを好きにはならないと決めたから。

「これからよろしく、みのり」

「こちらこそ。晃史さん」

人生において二度目、そして最後となるであろう婚約者は、誰もが羨むうらや美形でした。

三 自惚うぬぼれは変化の始まりかもしれない

翌日。ふわあと大きなあくびをしながら、私はテーブルの上に用意された朝食を摂った。朝食と言ってもすでに時刻は十一時、完全に昼食だ。

金曜から土日にかけて完全に夜型になる私は、だいたいいつもこんなものだ。食事を作ってくれ

たお母さんは、とつくにお父さんと病院へと出かけてしまった。

おじいちゃんのところへ寄ったら、その後は二人で食事でもして帰ってくるだろう。

うちの両親はいつまでもラブラブで娘とは大違いだ。

私は残ったパンを一口に頬張りながら、ご馳走様と手を合わせて皿を洗った。お母さんがいたら「行儀が悪い」などと聞こえてきそっだ。

仕事はきちんとしている。休みの日ぐらい自由に過ごさせてほしいと、別に誰に責められているわけでもないのに、心の中で言い訳をした。

お母さんは私の嘘に気づいている。

ゲームばかりしているのも知っているから、妄想ではなくそろそろ本当の彼氏でも作りなさいと言いたいのもわかる。

「ボツチだっというじゃん」

二十八歳で恋人がいない女性だっつてそれなりにいる。一生独身でいたいって人だっつて世の中にはきつというはずだ。自分の娘の話になると、親はそう達観できないものなのか。

おそろく、外見はそう悪くない——はずだ。

高校生の頃、告白された記憶がある。それに、思いだすのも嫌だが、昔付きあっていた恋人には可愛いとも言われた。

インドア体質だから肌は白いほうだし、食事も忘れてゲームばかりしているせいか太っつてはおらず、一五五センチで体重は四〇キロ台だ。

小学生の時から髪型は変わらずボブだけど、その頃からオタクだったわけではない。

最後に恋人がいたのは二十歳の頃。それまで、漫画やゲームの世界は自分に近いものではないかっつた。

「あ、そういえば恋人できたんだっけ……なんてね」

昨夜行きつけの飲み屋で声をかけられたことを思い出した。

恋人ができたときと久しぶりに言ってみたかっただけだが、冗談であつてもだいぶ虚しい。

「契約なんて冗談だよ。あの人も酔ってたんだろっし」

滅多に見られないイケメンを間近で見られて目の保養にはなつた。あれほどの美青年と話をする機会なんて、一生に一度あるかないかだ。

浮かれていたわけではないが、家族以外の誰かとあんな風に過ごしたのは久しぶりで、つい色々話してしまった。

お喋りが好きだつた昔を思い出してしまう。他愛もない話をして毎日が楽しかつたあの頃。

家族のこと、趣味の本やゲームのこと。昨夜、あの人とはたくさん話をした。

もう二度と会わない人だからこそ、話せたのかも知れない。

だいぶ酔いが回つて、自分がどうやって自宅に辿り着いたのかも実はあやふやだ。

洗い物を終えて部屋に戻ると、着替えもせずにテレビの前に置いた大きいクッションに腰を下ろす。

私もおじいちゃんのお見舞いに行きたかつたが、お母さんたちと鉢合わせするのは御免だつた。

「夕方くらいにお見舞い行こ。今日から新しいイベント追加されてるし」
心を躍らせながら、一年中出しっ放しになっているゲーム機のスイッチを入れた。テレビ画面の中から、目をキラキラさせた二次元のイケメンたちが私を見つめている。

いつも優しい言葉をかけてくれて、疲れた時は心配してくれる。忙しくて会えない時は寂しかったと言ってくれるし、まさしく理想の王子様。

「だって、ゲームの中の男の子は裏切らないしね……」

冗談めかして言ったはずなのに、埋めようのない虚しさむなに襲われる。一人でいるのは慣れている。寂しいだなんて、今更なのに。

ぼんやりとコントローラーを持ったまま画面を見つめていると、テーブルの上に置いたスマートフォンが震えた。

ぶぶぶつという振動に驚いてコントローラーが手から滑り落ちる。

「なにっ、電話？」

メールも電話も滅多めったに鳴らない。友達は一人も登録されていないし、用があつて掛けてくるのはおじいちゃんおじいちゃんと両親だけだ。

だから必要以上に驚いてしまった。

外にいるお母さんだろうかとスマートフォンを手取る。見覚えのない番号となぜか画面上に表示される名前。こんな人を登録した覚えはない。

「長谷川……兎史つて誰？」

昨夜のイケメンと思い当たるまでに数秒を要し、慌てて電話に出る。

どうして、まさかという思いで私の頭の中は大パニックだ。

「も、もしもしっ?」

『俺。覚えてる? 昨日のこと』

挨拶あいさつもなしに単刀直入に訊ねられて、私の胸には動揺が広がった。まさか、契約うんぬん云々の話は冗談ではなかったのか。

それよりもどうして連絡先を知っているのだろう。私から教えるなんてあり得ないし、そもそも自分のスマートフォンスマートフォンの連絡先の登録の仕方すらよくわからない。

(美形は声も綺麗なんだ……って、そうじゃなくて!)

緊張で高鳴る心臓が、どくんどくと音を立てた。

落ち着け、私。これは仕事だと自分に言い聞かせる。

深呼吸をし、襟えりを正して電話に向き直った。

「あの……長谷川さん」

事務的な声で呼びかける。

『なに? っていうか、どうして今日は長谷川さん?』

「連絡先交換してたんですね、私たち」

『ああ、忘れてるわけじゃなさそうで安心したよ。君あのと寝ちゃってさ、その間にスマホ拝借してちょっとね。今日電話したのは、君の意思を再度確認したいと思って』

「意思って、契約……ですか？」

夢だと思っていたわけではないし、酒には強いほうだ。昨夜話した内容はさすがに覚えてる。けれど、まさか本気だとは思いませんでした。

酒の場における言葉遊びの範疇はんちゆうだろうと思っていたのだ。

いい男に話しかけられて浮かれていたのだろうか。

ドラマや小説などにはありがちだが、現実的ではない。

問題があり過ぎだ。

『そうだよ』

「いや、どう考えても無理でしょう」

婚約者のふりなんて。

家族に婚約者として紹介されるなんて冗談じゃない。

私はおじいちゃんにウエディングドレス姿を見せてあげただけだ。いざとなったらプロに頼めばいい。

彼の提案は、あまりに私のリスクが高すぎる。

『そうかな？ どうして？』

「昨夜の話が本当だとして……あなたの家族を騙だますんでしょう？」

誰かを傷つけるようなやり方は好きじゃありませんから」

嘘だとバレたら、きっと彼の家族は傷つくだろう。

誰かを騙だまして傷つけるなんて、私はしたくない。

『嘘について君も同じことをするんだろ？ それに、傷つけようとしているわけじゃない。俺は、心配させないための優しい嘘だと思っただけね』

嘘について同じことをする、とは——なんとも痛いところを突いてくる。私は彼の嘘を非難できない。

重い病気に苦しんでいる相手に、さらに嘘を重ねるのだから。

派遣されてくるとこの誰かも知らない相手を、結婚を前提に付きあっている相手だと紹介するつもりでいるのだ。

「優しい、ですかね？」

『ずっと心配かけてきたから安心してほしいだけだろ？ 君の気持ちは俺にもわかる。俺も同じだと思ってくれていい』

「同じ……」

彼の言葉に気持ちが揺れた。

家族を安心させてあげたいのだと言われると、無下むげに断ることも憚はばられる。彼に頼むのも、ほかの誰かに頼むのも同じだと、つい自分に都合のいいほうへと考えてしまう。

『そうだよ。で、どうする？ 酔よいが醒さめてやっぱり嫌きらだって言うなら、俺は電話を切って君の番号を消すよ。会ったばかりであまりしつこいのはウザいだろ？』

「あの……考えると、私より長谷川さんのほうが大変だと思っんですけど……いいんですか？ 契

約が終わった後、面倒なことになりませんか？」

私はなにを言っているのだろう。

これでは、もう契約に應じると言っているようなものだ。けれど、彼の言う「優しい嘘」の話に乗ってもいいかと思ってしまった。

彼の家族にバレたとしても責任は取れない。

それでもいいと約束してくれるのなら。

『大丈夫。君に迷惑はかけない。でも、家に来てもらうんだ。やっぱり負担は君のほうが大きいと思うから、ドレスのレンタルや段取りは俺がするよ。なんなら本当に式を挙げたっていい』

彼がそこまでする理由はなんだろう。

結婚に乗り気じゃないのは本当だろうが、いくら名家だからといって嫌だと言っている彼を無理やり結婚させるだろうか。

話を聞いただけが、家族仲はよさそうなのに。

私は疑問を抱きながらも、これ以上聞いてしまったらどうしたって後戻りができないような気がして、口を開くのをためらった。

『おじいさんにドレス姿見せてあげたいんですよ？』

二の足を踏む私の気持ちを悟ったのか、答えを急かされているように感じた。

今決めないと、次はないと。

骨が浮きでた、おじいちゃんの指を思いだした。力なく握られた手のひらは、思っていたよりも

ずつと小さかった。

(時間は……もうあまりないのかもしれない……)

もしこのチャンス逃したら、おじいちゃんにドレス姿を見せてあげられる機会は二度とないかもしれないんだ。

「わかりました」

冷たい汗が額を流れ落ちた。おじいちゃんに嘘をつくことへの罪悪感と、他人を騙すことのようにろめたさに襲われる。

けれど、淡々と話す彼の声は昨夜と同じで、夕飯のメニューを決めているかのように深刻さはまるでない。

『じゃあ、時間がある時にもう一度会わない？ 俺は今日でも大丈夫だけど、みりの都合に合わせるからさ。これからについて話しあっておきたい。それに婚約中なんだ……名前しか知らないじゃおかしいし』

「わかりました。私も、これから大丈夫です」

電話を切って、あまりに非現実的な出来事に深いため息が漏れた。

何度も逡巡してしまう。本当にいいのだろうか。

彼に指定された待ちあわせ場所は、おじいちゃんが入院する病院の近くにあるオープンカフェ

だった。

すぐ近くにはトラックが頻繁に通る国道があるが、一本脇道に入っただけでずいぶん静かなものだ。

趣ある古民家をリノベーションして造られたカフェは、開放的な一面のはめ殺し窓が目を引き、ウッドデッキにはパラソルの下で食事を楽しめるようにとテーブルが置かれていた。

和の雰囲気があり女性は好きそう。けれど、思いっきりカップル向きな店舗であるのは間違いない。どうしたって尻込みしてしまう。

昔はお洒落なカフェや雑貨屋が好きだった。けれど、ここ八年立派な引きこもりをしていた私には相当入りにくい。

私は目立たないように下を向いて店内へと足を踏み入れた。きゃっきやと楽しそうな女性たちの笑い声が響いていて、それだけで萎縮してしまう。

彼の姿を探して店内を見回すと、やたらと客の視線が同じ方向へと向いている。不思議に思っ

て視線の先を見ると、そこにいたのは彼だ。
糊の利いたワイシャツにストラックス、茶色の革靴というどこにでもいる会社員の装いなのに、着る人によってこうまで変わるのかと見惚れてしまう。

あれだけの容貌をしていればモテるはずだ。

もしこの店内で「俺の婚約者になってくれる人いるかな？」という方法で、別の女性を探したなら、きっと数秒もかからずに何人も女性が手を挙げるだろう。

「長谷川さん、お待たせしてすみません」

私は目の前の椅子を引き、彼に声をかけた。

持っていた鞆を椅子の下の籠に入れて座ると、彼はほんの少しだけ驚いた顔をした。もしかして私が来ないと思っていたのだろうか。

約束した以上そんな非常識な真似はしないのに。

「いや、急に連絡したのこっちだから気にしないで。それよりいいかげん『長谷川さん』って呼ぶのやめない？ 昨日みたいに下の名前で呼んでよ」

「まあ……そうですね」

「なに飲む？」

「あ、じゃあ……カフェオレで」

満席に近い混み具合なのにもかかわらず、晃史さんが軽く手を上げただけで、女性店員がこぞつて足を進めた。

正直、客を取りあつて店員が火花を散らす光景など初めて見た。どの女性も可愛らしくて、彼の隣にいたとしても見劣りしない。

私は——と自分の姿を見つめる。膝丈のデニム生地のスカートに無地のティーシャツ。髪は一応梳かしたが、うしろ髪が撥ねている。

無性に恥ずかしくなって、晃史さんの顔が見られない。

「すみません、カフェオレとアイスコーヒーお願いします」

「かしこまりました」

周囲の視線に気づいているのかいないのか、彼は店内の騒めきなど気にする様子もなく注文を済ませた。

女性の扱いに慣れていると感じる。この程度は日常茶飯事なのだろう。

隣の席が離れるとはいえ、周りの女性たちからの視線が痛い。「彼女普通じゃない?」「あんなのが?」そう言われているような気がする。

あながちそれは被害妄想でもないから余計に居た堪れない。「え、あれが彼女?」って聞こえてるから!

注文をしたばかりなのに、私はもう逃げたくなってしまった。

これだけ美形であれば当然かもしれないが、やはり早まったとしか言いようがない。

ぱっと見でもじっくり見ても、晃史さんはやはり人目をひく。

精悍な顔つきと優雅な所作が組みあわさると、嫌味のない自尊心の高さが窺える。むしろこれほどの美形で謙虚であったなら、それこそ嫌味だろう。

まつ毛は長く、髪の毛には赤ちゃんのようなキューティクルがありサラサラだ。目の色が日本人の黒ではなくて、太陽の光にあたると薄茶色っぽく変わる。

一つ一つのパーツが整っていて怖いぐらいなのに、ふわっと優しく笑うから、晃史さんを好きな女の子は勘違いしてしまうのではないだろうか。

もしかして私を好きかも、と。

誰にでも壁がないというか、隙だらけというか。でも、深いところは見せてくれない。

簡単に一步踏み込めたと思っても、彼の内側にはもう一枚分厚い壁がありそうだ。

「どうかしたの?」

「いえ。晃史さん、めちやくちゃ目立ってますね」

「そう? みのりが可愛いからじゃない?」

(可愛い……って)

ドキッと高鳴りそうな胸をなんとか抑えて平静を保つ。

彼は自分が女の子からどう見られるかをわかった上で、わざとやってるに違いない。試されるような気さえしてくる。

俺を本気で好きにならないよね、君。好きになったら契約はナシだよ——そんな風に。

「わかっててそういうこと言います? この状況で私が見られてるなんて誰も思いません。過ぎる謙遜は嫌味ですよ」

「ははっ、おもしろいよね、みのりって。じゃあなに、俺ってかっこいいからさ、とでも言えればいい?」

悪戯っぽく首を傾げる仕草すら様になる。かっこいいからさ、と言ったところで嫌味にもなりはしない。

「あ、それもちょっとムカつきますね」

「だろ? それにみのりが可愛いっていうのも嘘じゃないよ」

「はいはい、ありがとうございます。晃史さんも十分おもしろいですよ」

「嘘じゃないんだけどなあ。ちょっとデートっぽい格好で来てくれるし。驚いたよ、すごく可愛いわ」

彼の指摘に、今度は頬が熱くなるのをとても抑えられなかった。

（意識、したわけじゃないけど……）

もちろんデートだと思っただけでもない。

名前からしてお洒落なカフェを指定されて、部屋着のジャージで店に入る勇気がなかっただけだ。「さすがに家の近くの居酒屋に行くような格好で、こんな場所来られませんよ」

「別にいいのに。昨夜みたいなラフな格好も似合ってたよ」

「もうやめてください。自分で自分の見た目はよくわかってますから。で、前置きはいいですから、どうしますか？」

ちょうど頼んだ飲み物が運ばれてきて、晃史さんは抜け目なく「ありがとうございます」なんて愛想を振りまいている。

女性店員は頬を染めて恍惚とした顔をした。やはりモテる男は違う。

「そうだね、じゃあまずはちゃんと自己紹介といこうか？　っていうか、みのりは敬語やめてくれないの？」

「あ、そうですね。婚約者なんだからずっと敬語じゃおかしいし」

「飲んでる時は普通に喋ってくれてたのに」

「酔っぱらってたんで、ちょっと調子に乗ってたかも」

あなたのかっこよさに見惚れて頭が回らなかつたんです、と正直には言いたくない。

「じゃあ、これからは普通に話してよ。で、名前は言ったと思うし……あ、年齢は三十二ね。職業は実家の病院の事務長してる。趣味は……うーん、昔はキャンプとか好きだったんだけど、今は仕事に興味のつまらない男。好きな食べ物は何も。嫌いな食べ物はバナナ。ほかに聞きたいことがある？」

大きい家だとは聞いていたけど、病院を営んでいると聞き納得だ。ただ継ぐと言ってもそう簡単ではないだろう。家族経営ならば、跡継ぎの問題も理解はできた。

それにしても昨日居酒屋で会った時もあったが、これほど庶民的な料理が似合わない人もそういない。失礼だが、その顔でカツ丼を食べるのかと想像するとなんだか可笑しい。

「毎日コース料理食べてそうって思ってた」

「まあ、堅苦しい料理は仕事で食べる機会が多いから。牛丼のチェーン店とか行くとなんかほっとするんだよね。昨日入った店も初めて行ったんだけど当たりだったな」

「あそこ美味しいよね。焼き鳥はタレ派？　塩派？」

「俺は塩かな。そこ重要？」

晃史さんはおもしろそうに笑いながら聞いてくる。

「あの店のタレは絶品だから、嫌いじゃなかったら今度ぜひ食べてみて。で、次は私よね。えーと、歳は二十八。短大卒業した後、銀行で事務仕事をしてます。結構見たまんまで申し訳ないんだけど、

趣味は漫画にネットゲームと一人飲み。好きな食べ物は焼き鳥で、嫌いな食べ物は私もバナナ。あのネチヨネチヨした感じがどうも受け入れられなくて」

昨日今日で、この八年分以上の会話をしているように思う。

会社の同僚とはプライベートな会話は一切しない。それどころか、同僚は私の下の名前すら知らないだろう。

晃史さんに話せるのは、たぶん、私を何一つ知らない相手だからだ。

大抵オタクだと言えば引かれるし、会社帰りに同僚と飲みに行くのも、私には縁遠い。

私の周りには最初から分厚い壁ができていて、誰かと関わるのを恐れている。

「ははっ、わかる」

「引いた？」

引かないわけがない。それでも一応聞いてしまったのは、まだ私にも異性によく思われたという感情が残っていたからだろうか。

「どうして？」

「いや、だって普通ゲームと一人飲みが趣味の女なんて、たとえ契約でも関わるのは御免でしょ」

「そう？ 趣味を隠してカフェ巡りが好きです、とか言ってる女の子よりよっぽどいいと思うけど？ 焼き鳥好きなのもポイント高いしね。それにさ、俺、こうやって座ってるだけで勝手に写真撮られるんだよね。昨日飲んだ時、俺にスマホ向ける女の子睨んでたでしょ？ 嬉しかったよ」

まさか気づかれているとは思わなかった。

大衆居酒屋に彼のような人がいたら注目的だし、女の子のミーハーな思いが理解できないわけではない。

けれど、黙ってカメラを向けるのはルール違反だと思っただけだ。声に出して言えないのは性格ゆえだが。

「そんな褒めてもなにもでないよ？ 睨んだって効果なかったし」

「過ぎる謙遜は嫌味なんだろ？ そこはありがとう、でいいんだよ」

「ありがとう」

なんだか面映ゆくて、頬が熱い。

自分の行動を褒められる機会など久しくないからだろう。

「みりのおじいさん、入院中って言ってたけど容体はどう？」

晃史さんは居住まいを正して言った。

おじいちゃんを思うと不安で堪らない。ツンと鼻の奥が熱くなって涙が溢れそうになる。

「延命治療……っていうの？ 手術すればもう少し生きられるかもしれないけど、おじいちゃんが望んでないんだって。苦しそうなおじいちゃんを見てるのは辛いよ」

「そうか。なら、なるべく早いうちに会いに行きたいな。病院はどこ？」

「長谷川総合病院だけど……」

「うちの病院か」

（うち……？）

そういえば晃史さんの名字は長谷川だ。しかし、病院内で会ったことはない。これほどの美形を一度見たら、さすがに私だって忘れないはずだ。

「もしかして、みのりのおじいさんって山下源蔵さん？」

「知ってるのっ？」

「ああ、でも話したことはないよ。向こうは俺を知らないと思うから安心して」

患者の情報を頭に入れてあるだけで、普段は院内にはおらず別棟で仕事をしているのだと晃史さんは言った。

「そっか……おじいちゃんを知ってるんだ。それって、大丈夫かな？ 職場近くで私と一緒にいたら、周りに色々と言われない？」

まさか、晃史さんが働いている病院だとは思わなかった。きっと、これだけかつこよければ周りからアプローチもあるはずだ。病院で働く人たちにバシるのはまずいだろう。

「言われていいんだよ。むしろ好都合だから気にしないで。みのりは、付きあってる人について家族になにか言った？ 俺とあまりにイメーシが違うと困るだろ？」

「いずれ結婚する、とかは話の流れで言ったかもしれないけど。相手の職業とかは話してないはず。晃史さんは？ 年齢とか大丈夫？」

「俺は付きあってる人がいるって言っただけだから平気。ジャージ姿で来てもいいよ？」

「そんなわけないでしょ！ ってどうか病院経営してるんなら、晃史さんって御曹司でしょ？ なんか今更不安になってきたんだけど」

両親は口うるさくなくないと言っていたような気がするが、結婚相手に求める条件は色々でありそうだ。

楽器はなにをしたらしたの？ ——なんて聞かれたら完全にアウト。リコーダーとでも答えればいいか。

「為せば成る」

「もうっ……晃史さんは緊張とかしないわけっ？」

「ん〜緊張っていうか楽しみなかな」

「え、なにが？ おじいちゃんに会うのが？」

「いや、みのりのウエディングドレス姿」

悪趣味過ぎる。

（もしかして、本気で楽しんでる……？）

凶太いというかなんというか。万が一失敗したら、誰かも知らない人と結婚することになるかもしれないという危機感はないのだろうか。

「やっぱ、モテる男は言うことが違いますね……」

「うわ、そんな蔑んだ目で見ないでよ。本当だって。ね、信じて？ みのりは可愛いと思うよ？」

晃史さんの顔が近づいてきて顔を覗き込まれると、私の心臓はどくどくと激しく音を奏でる。

（そんなに人の顔じつと見ないでよ……美人でもないのに。もう、恥ずかしすぎる……っ）

私の顔色は先程から赤くなったり青くなったりと、忙しい。

こっちは八年も干物でいて耐性がないのだから、ちょっとは手加減してほしいものだ。男の人とこういう場所で会うのだって、前の恋人以来なのに。

「そろそろ行こうか」

「どこに？ あ、もう帰る？」

デートでもあるまいし、カフェでずっと喋り続けるわけにはいかない。ある程度の情報交換はできた。あとは約束の日を待つだけか。

なんとなく残念な気持ち芽生えて、私は自分の気持ちを誤魔化すように氷がすっかり溶けきった水を飲み干した。

「時間あるなら、もう少し付きあってよ。デートしよう」

「デ……っ」

ふわりと柔らかく微笑まれて、さらに私の胸はおかしな音を立てる。

本当に付きあっているわけじゃないのに、勘違いしそうになる。

(晃史さん、距離感が近過ぎるんだよ……)

彼の行動や言葉は、まるで本物の婚約者だ。本当に愛されているような気になってくる。

知り合ってまだ二日しか経っていないのに、彼の優しさや外見だけではないかっこよさが、十分過ぎるほどにわかってしまった。

昨夜、私のジャージ姿を一度もからかったりしなかった。かと思えば、私を可愛いだなんて。お世辞だとわかっていても嬉しい言葉だ。女性を喜ばせる手管てくだに長けてたいる。

「ほら、見合いみたいに趣味を伝えあたって覚えられないだろ？ 一緒に過ごすのが一番手っ取り早い」

「どこ行くの？」

「早いな」

「じゃあ、みのりが行きたいところを紙に書いて。俺も書くから、はいペン。車で来てるから多少遠くても構わないよ」

晃史さんは、紙ナプキンを二枚取り一枚を差しだしてきた。

これに書くらしい。面倒な気もするが、不思議と私は心が浮き立つような感覚がした。

「あ、うん」

しかし、悩む。どうしよう。行きたいところと急に言われても思いつかない。

いくら晃史さんが車で来ているといっても、遠出は無理だ。帰りも考えるとそんなに遅くまでは

いられないだろう。だったら、近場で……

外に目を向けて見ると、病院近くにはたぐさんの店が並んでいる。

私は思いつくままにペンを走らせた。晃史さんも私に見えないようになにかを書いている。

ゲームのようでドキドキする。

行きたいところがまったく別だったらと考えると不安になった。お互いを知るといっても、気が

合わないと知ることになるのではないかと。それならそれで困るわけでもないのに。

「書いたよ。みのりもいい？ はい、じゃあここに出して」

「はっ」

緊張のあまり目を瞑つぶつたまま、晃史さんに紙ナプキンを手渡した。受け取った晃史さんの口からくすつと笑いがこぼれる。

あまりに見当違いの場所を書いてしまったのかと心配になり、恐る恐る顔を上げると、晃史さんは二枚の紙ナプキンを私に見えるようにテーブルの上に並べた。

「俺たち結構気が合うみたいだね」

(嘘……っ！)

こんな偶然本当にあるのだろうか。

私たちは、まったく同じことを考えていたらしい。

「嘘でしょ……」

「ね。嘘みたいだ。じゃあ、行き先も決まったし、お手をどうぞ？」

「手……？」

「そ、どこで誰に見られてるかわからないからね。契約だとしても、俺たちは婚約者だろ？」

「うん。じゃあ、お願いします」

どれだけの間かはわからないが、おそらくそう長くはない。きっと必要がなくなったら、ぱつたりと会わなくなるのだろう。

けれど利害関係が一致しているから、少なくともその間、私は彼を信じられる。

彼が私を必要だと思ってくれるなら、しばらくは仮か初そめの婚約者でいよう。

「じゃあ行こう」

差し込まれた手を握り返して、私は覚悟を決めた。

「可愛い〜！ もふもふしてる〜！」

予想以上に楽しい。

私は小さくて丸い、毛艶のいい生き物に頬を擦り寄せた。

あごの下をこちょこちょとかくと、腕の中の猫は気持ちよさそうに目を細めて、くわつとあくびをした。

可愛くてずっと撫で回していたくなる。

「猫って癒されるよね」

晃史さんも満足そうに足に擦り寄ってくる猫たちを次から次へと抱っこしている。もしかして私に合わせてくれたのかもと思っていたから、その姿を見て安堵あんどの思いがした。

それにしても、晃史さんとベルシャ猫の組みあわせって、どこぞの王族のようだ。王冠かぶって周りの美女たちに扇子せんすであおがれてそう——なんて、漫画の世界のような想像をしまい思わず笑みが溢れた。

「なんか、晃史さんとこだけ、猫多くない？」

私のところには二匹。晃史さんの周りには、膝の上で満足そうに撫でられている猫を含めると五匹もいる。

きつと全員雌メスに違いない。

人間だけではなく、猫をも引き寄せるフェロモンでも出ているのだろうか。

「ああ、なぜか俺、子どもとか動物に好かれるんだよね」

「ええ〜いいなあ」

人間はどうでもいいけど、動物には好かれるたい。

つい羨うらやまましくなつてそう告げると、晃史さんが私の肩を抱き寄せるように引つ張つた。

「ほら、みのりもこっちおいで」

とんと肩と肩がぶつかつて、どうしたらいいのかわからなくなる。

慌て離れても失礼かもしれないし、ずっとくっついたままだと私のうるさく鳴る心臓に非常によろしくない。

私はさも気にしていない風を装って、猫にだけ目を向ける。

「あ、晃史さんに抱っこされてるこの子……寝ちゃってるね」

「本当だ」

猫を起こさないように小声で話しながらも、柔らかい毛を撫でる手は止まらなかつた。

(ここに来てよかつた。晃史さんも楽しんでくれてるみたいだし……)

「気を遣つてくれるのかと思つた」

私は猫を撫でながら、ぽつりとこぼした。

「どうということ？」

「私がインドアだから、合わせてくれたのかなつて」

「行きたいところを書くつて言つたでしょ？ 俺も来たかつたんだよ」

そうは言うけれど、昔はアウトドアが好きだつたと言つていた。

本当はさつき、紙ナプキンに書いてる私の手元を見ていたのは知っている。

(私に合わせてくれたんだよね……)

好きになつた人に嫌われたくなくて、必死に彼の趣味に合わせていた頃を思い出す。そういえば、あの人からどこに行きたいか聞かれたことはなかつた。

思い浮かべた過去に、ちくりと胸が痛む。もう慣れたその痛みをやり過ごして、私は楽しそうに

猫を抱き上げる晃史さんを見つめた。

(私……本当は誰かとこんな風に過ごしたかつたのかな)

次どこかに出かける時は、彼の趣味に合わせても楽しいかもしれない。

「うん、ありがとう。楽しい」

私がそう告げると、晃史さんは目を細めて微笑んだ。

「私、次はバーベキューつて書くね」

「言つたら意味ないでしょ」

「そんなことないよ。ずいふんと優しい婚約者みたいだから」

「お褒めに預かり光栄です。ああ、そうだ。ドレスとタキシード選ばないとね」

「ドレス選ぶの、付きあつてくれるの？」

まさかと思つて聞き返すと、晃史さんは当たり前だとも言わんばかりに頷いた。

正直、一人でウエディングドレスのレンタルなんて行きたくはなかった。おじいちゃんのためとはいえ、虚むなしくなりそう。

「一緒に行かないと俺のサイズもわからないでしょ？ それに花嫁に一人でドレス選ばせたりしないよ。当日のお楽しみにしたくないなら別だけど」

「ううん、一緒に選んでほしい」

「じゃあ来週にでも行こう。写真も撮りたいし」

「写真？」

「そう、記念にね。おじいさんも喜ぶでしょ？ もちろんみのりが誰かと結婚する時には、捨ててくれて構わないから」

「ん……わかった」

私はその場で手帳に予定を書き込んだ。

真つ白なスケジュール帳に、晃史さんとの予定が埋まる。こうして誰かと約束をするのもずいぶんと久しぶりだ。

きっと私は、晃史さんと撮った写真を一生捨てられないだろう。「記念受験」なんて言葉があるが、これは「記念婚約」だ。記念にしてはこの婚約はかなり贅ぜい沢たくである。

(晃史さんでよかった……)

たとえ契約だとしても、ほかの人ではなく彼が相手でよかった。

晃史さんもそう思ってくれたら、少しは胸が軽くなる。

四 バージンロードに立つ瞬間こそが幸せの絶頂である

翌週土曜日――

私は晃史さんと待ち合わせをして、ホテル内にある結婚式場の貸衣装店に来ていた。花嫁さんって大変。

ウエディングドレスを着て初めに思ったのはそれだった。動きにくいし、新郎と身長を合わせるために、多くの人は高さのあるヒールの靴を結婚式と披露ひろう宴えんで履はき続けるらしい。

仕事の時もあるべくヒールのない靴を選んで履はいている私からしたら、数時間もこんな靴を履はいているのなんて信じられなかった。

こうして着替えて靴を履はくだけで、ふくらはぎが震えて足が攣くりそうになるのに。

「これもいいね」

晃史さんが真剣な眼差しで、鏡の前に立つ私を見つめて言った。

そしてスタッフに指示を出したかと思えば、デザインと色合いの違うドレスが手渡される。

「え、まだ着るの？」

「当たり前。主役は女の子なんだから。疲れたら休みながらいいから着替えておいで」

私はドレスを手に思わずため息を漏らす。ふりにしては真剣に選び過ぎだろうと。
(もう十着は着てるんですけど……)

結婚式は花嫁が主役だとよく言うが、きつとタキシードを着た晃史さんのほうがよほど絵になる。定番の白は絶対似合うだろうし、グレー系もいい。

自分が着飾るよりもイケメンをコスプレさせるほうが百倍楽しいに決まっている。これだけ見目のいい男の人を着せ替え人形にする機会など、もう二度とない。

私は肩が開いたドレスに着替えながら、晃史さんのタキシード姿を想像してニンマリと口元を緩めてしまう。

女性スタッフの手を借りながら、晃史さんの待つ場所まで歩いていった。

「あ、これ大人っぽくていいな。ちよっと背伸びし過ぎな気もするけど」

私は自分の姿を鏡で見ながら言った。

似合っているなどとは思わないけれど、フリルが全体にあしらわれた可愛いドレスより、シンプルで大人っぽいドレスのほうが自分のイメージにも合うような気がした。

「よくお似合いですよ」

その台詞も、かれこれも十回以上聞いている。

晃史さんの反応はどうだろうと、鏡越しに背後の彼に視線を向けた。私は九センチのヒールの靴を履いているが、晃史さんの隣に立つとそれでも小さく見える。

「どう？」

「それいいね。うん、可愛い。みのりはどう？ これがいい？」

「うん。私はこのドレスが一番気に入ってるかな」

「よし、じゃあそれにしよう」

初めから私が入るドレスを選ばせてくれる気だったのか、これがいいと言うと呆気なくドレスは決まった。

「晃史さんのは？」

「さつき適当に決めておいたから、着替えてくるよ」

せっかく晃史さんのタキシード選びを楽しみにしていたのに。

試着室に入った晃史さんは、私が撮影用の小物を身につけている間に着替えを終えて出てきた。

(うわ……モデルみたい……かっこいい)

黙って鏡の前に立っているだけなのに、どうしてこれだけ様になるのだろう。

「この色なら合うかな？」

私が着るドレスに合わせた、光沢のあるキャメルのモーニングとシャンパンゴールドのベストは、晃史さんの精悍な顔つきをさらに際立たせていた。細身だと思っていたが、意外に逞しい身体つきにも惚れ惚れするばかりだ。

「すごい」

「ははっ。なに、すごいって」

晃史さんの隣に立つ本物の花嫁はきつと幸せだろう。

偽物の婚約者である私ですら、この人のそばにいてこんなにも浮かれてしまうのだから。私も昔は、いつかこんな日が来ると夢見ていた。

好きな人に愛されて、プロポーズされて——そんな未来が当たり前にあるのだと思っていた。過去を思いだせば、焼けつくように胸の奥のほうがじりじりと痛む。

「ああ、新郎様の用意も終わったようですね。行きましょう」

「は、はい」

新郎様という言葉がどこか面映ゆく感じられて、私は俯きがちに目を逸らした。空いているチャペルを、写真撮影のために使わせてもらえらうしい。

私たちが結婚式は挙げないから写真だけと言うと、式場スタッフも貸衣装のスタッフも理由を深く聞いてはこなかった。色々な事情で写真だけ撮ると言うカップルも多いらしい。

「じゃあ行こうか。歩きにくいだろ？ 腕に掴まりなよ」

「や、大丈夫」

そう言ったものの、スタジオからの移動は思いの外大変だった。ドレスの裾をスタッフが持つてくれているが、私は見えない段差に躓いてしまう。

前のめりに倒れかかると、正面から晃史さんの腕が伸びてきて私を抱きとめてくれた。

「あつ……ご、ごめんなさいっ！ 大丈夫？」

咄嗟に晃史さんが支えてくれなければ、下は柔らかい絨毯とはいえ身体ごと床に倒れてしまっていただろう。

驚いたのももちろんあるが、それ以上に、腰に回された手にドキドキして、私の心臓は壊れそうなほどうるさく鳴り響いた。

「慣れないヒールで歩きにくいんでしょ？ やつぱり、俺の腕にちゃんと掴まって」

腕を差しだされて、王子様然とした振る舞いに、いちいち私はときめいてしまう。だって、こんな少女漫画的展開、自分に訪れるとは露ほども思っていなかった。

「う、うん。ありがとう」

後をついてきていたカメラマンやスタッフが、一様に口元を緩めている。

新婚カップルにありがちな状況を微笑ましく見つめられていると思うと、穴があったら入りたい心境だ。

確実に真っ赤に染まっているだろう頬を隠すように下を向いて、段差に気をつけながら歩いた。本格的な大聖堂を意識したチャペルは、天井が高く窓にはステンドグラスがはめ込まれている。

太陽の日差しで幻想的に輝いたステンドグラスや、アンティークな雰囲気装飾が、さらに日常を忘れさせてくれる演出になっていた。

これから夫婦になる二人だけが通れるバージンロード。

私たちはスタッフの後に続いて参列者側から中へと入った。

バージンロードを歩く機会などないだろうから、一度は歩いてみたい思いはあったのだが「本物の結婚式当日に」と言われて止められてしまった。

「じゃあ、何枚か撮っていきますから、にこやかにいきましょう」

ステンドグラスをバックにして祭壇の中央に立つと、カメラが向けられる。写真なんて撮り慣れていない私は、笑おうとしても引き攣った笑みになってしまう。

私たちを本当に祝福してくれているような笑顔がスタッフから向けられて、どうにも気恥ずかしくてならない。

「新郎様、手を新婦様の腰に回しましょうか。はい、そうですね〜」

カシャッとシャッターが切られた。

肘にそっと掴まりながら赤らんだ顔を晃史さんに向けると、柔らかい微笑みが返された。契約だとわかっていてもそれを感じさせない彼はすごい。

本物の花嫁は私以上に、きつと幸せな気持ちに包まれるのだろう。

もう誰かを好きにはならないと決めたけれど、もし私にあんな出来事が起こらなければ、もしかしたら結婚という未来もあつたのではないか。

ついそんな風に考えてしまうのは、彼が与えてくれる優しさがあまりに温かく居心地がいいからだ。

「みのり、緊張した顔してるね」

「そりゃ……当たり前じゃない？ 晃史さんは余裕だね」

「うーん、俺もそれなりに緊張してるかな」

「そうは見えないけど」

シャッターの音が響く中、疑いの眼差しで晃史さんを見つめる。

目が合った瞬間、彼は照れたようにふっと笑った。

私も釣られてへらっと頬を緩める。その瞬間に何回ものシャッターが切られた。

そろそろ表情筋がピクピクと引き攣りそうになっていると、やつと終了の声がかかった。

「じゃあこれで終わりますね。いいのが撮れましたよ。お二人とも幸せそうです」

カメラを下ろしたスタッフに告げられて、私たちはチャペルを出た。

ようやく緊張していた肩から力が抜ける。

着替えるために晃史さんと別々の試着室に入ると、着替えを手伝ってくれる女性スタッフが鏡越しに口を開いた。

「優しい旦那様ですね」

頬を染めた様子が、以前にカフェで会った女性店員を思い起こさせる。

式場のスタッフすら魅了してしまうとは、恐るべし。

「そう、ですかね……」

謙遜でも嫌味でもなく聞き返した。世間一般の結婚前のカップルは同じようなものではないのだろうか。

「奥様のドレス選びにここまで時間をかけてくれるご主人なかないけませんよ。たまにお一人でらっしゃる女性もおられますから」

「ええっ？」

「ここだけの話……ウェディングドレスは白ばかりで、全部同じに見えるって言った方もいらっ

しゃいましたから……」

この仕事にプライドを持っているのか、心底残念そうに女性スタッフは言った。たしかに一生に一度とはいえ、ドレスやタキシードのデザインなど男性はあまり興味を持ってないのかもしれない。

「夢がないですね」

「ふふっ、お二人は本当に素敵ですよ。ぜひ、結婚披露宴はうちの式場をご最前くださいませ。最高の演出をさせていただきますので」

私たちがここで結婚式を挙げる日は来ない。

しかし、それはないと否定するのも憚られて、私は肯定も否定もせずに口元を緩めるに留めた。撮影スタッフや貸衣裳店の女性スタッフに礼を言っ、私たちは式場を後にした。

「お疲れ様」

あまりに私がぐったりした様子でいるからか、晃史さんが案じるように腕を差しだしてくる。

全身がクタクタで、もう足が棒のように重かった。遠慮なく腕に掴まらせてもらおう。体力的な問題なのか、疲れた顔も見せずに平然としている晃史さんが少し恨めしい。

「ウェディングドレス試着するだけであんなに疲れるとは思わなかった」

「あれだけ何度も着替えればね」

「あれもこれもって言ったの晃史さんでしょ？」

着替えるの結構大変だったんだからと恨み言を言っても、ごめん、ごめんと悪びれることなく

わされてしまう。

「でも、あのドレス似合ってたよ。あ、ちょっとじっとしてて」

「え……」

風で乱れた髪を耳にかけられて、彼の行動にもうため息しか出ない。

なんとも思っていない相手に触れ過ぎた。今は婚約者だからという彼の言い分は理解できるが、それだけではない。

「晃史さんって……」

「なに？」

「天然なの？ それ」

天然じゃなかったとしたら人たらしだ。

よく今まで刺されなかったなと心配になってしまう。

ただの偽物の婚約者にすら、勘違いさせるほどの愛嬌を振りまいているのだから、私と同じ気持ちの女性は一人や二人ではないだろう。

「それってどれ？」

「わかった……天然ってことにしとく」

「だからなに」

彼は訳がわからないといった顔をする。

もう呆れるしかない。

「うん？ 晃史さんを好きになる女の子って大変だなんて思っただけ」
もしかしたら私を好きかも、とみんな思うだろう。

特別扱いされていると感じるはずだ。けれど、彼は誰にでも同じだけの温度で接するタイプだ。たった一人にだけ向けられる愛情を期待してはいけない。

きっと女の子なら自分だけが優しくされたいものだと思う。ほかの人とは区別をしてほしい。ただ、晃史さんが相手ではかなり苦労しそうだ。

「そう？ 俺、女の子には優しくするよ？」

「だから大変なんじゃない。彼氏が誰にでも優しい人なのは嫌じゃないけど、嬉しくはないよ。私とどっちが大事なの、とか言われてそうだし」

「みのり、エスパー？」

どうしてわかるの、と聞かれて私ほうなだれた。もう、まんまだ。

「言われたんだ」

「別れる原因がだいたいそれ。ま、自分でもわかってるんだけどね。それほど相手に興味を持ってないって」

ということとは、私にもそれほど興味を持っていないのだろう。

そうだろうなとは思っていたけれど、興味のない相手に優しくするのも疲れるだろうに、どうしてわざわざ。

「興味持てない人となんで付きあうの？」

「恋人がいるとほかの女の子を断る時便利だから」

「うわあ、下衆げすい」

思ったよりも最低な理由に二の句が継げない。

「下衆げすいって…酷いなあ。同時に複数と付きあってはいいないよ。ちゃんと相手が望む通りに動くし、毎日電話してって言われたらするよ。そのうち面倒になって会わなくなるけど」

「どれだけ優しくしてあげても、女の子は気づくよ。晃史さんが自分を好きで付きあってるわけじゃないって」

「そうだろうね。だから長続きしないんだ」

「なんか納得。どうして私みたいなのに声かけたのか」

晃史さんは自分から女性に声をかけるタイプではない。

思っていた通り、きつと頼めば望んで婚約者のふりをしてくれる人がたくさんいるのだろう。それなのに、どうしてあえて私なのかとずっと考えていた。

居酒屋で隣に座っていて、互いに結婚相手を探していたというのは偶然だろうけれど。彼はある種の予感があったはずだ。

「どうしてだと思おう？」

「本気であなただを好きにならなそうだから…違う？」

思い浮かんだ答えはそれしかなかった。

私を試すように甘い言葉をかけては、俺を好きにならないでと牽制けんせいされているような気がした。

ずっと不思議だったけれど、言葉にしてみると間違いだとは思えない。

「当たらずとも遠からずってところかな。初めて会った夜……みよりは誰も信用しないって顔してたから。きつと俺の話も嘘だったらそれはそれでいいって、そんな風に思ってたかった？」

「そうかもね。どんなに優しく見えてる人だって裏切ると知ってるから。最初から信じないほうが気が楽なんだ。気を悪くさせたらごめんさい」

晃史さんの言葉は当たっている。

私はあの日から誰も信用しないと決めた。

たとえ誰かに胸を高鳴らせても、この先、家族以外の誰かを本気で大切に思うことも、愛することもないだろう。

「いや、気にしなくていいよ。お互い様だからね」

また誰かを好きになって、また裏切られたら私はもう立ち直れない。

それなら、この人だつてきつと私を騙だましているのだと、それぐらいの気持ちでいたほうが気は楽だ。

私は、もう二度と誰も好きにならないし、友達も作らない。

他人を絶対に信用しない。

二十歳のあの日傷つけられた胸の痛みは、八年経った今もちつとも癒えてはいなかった。

五 愛されたいと願うのは、間違っていたのだろうか

一生に一度の恋だと思っていた。

三歳年上の諒りょうちゃん——大沢諒おおさわりょうすけ介は、二十歳の私から見ると、大人としての魅力に溢れた存在だった。

身体を動かすのが好きらしく筋肉質で背も高い。

耳の下まで伸ばされた髪は、パーマがかかっついていて、毛先だけが明るい茶色に染められている。

大学を卒業した一年前からお父さんが社長を務める製薬会社で働いている諒りょうちゃんとは、私が働き始めたばかりの四月に友達の紹介で知りあった。

強引なところはあがるが、優しく大人で、尊敬できる諒りょうちゃんに、私はほとんど一目惚れだった。勢いのままに好きだと告げると、会ったばかりなのに彼は『俺たち付きあってみる？』、そう聞

いてきた。諒りょうちゃんも私を好きでいてくれるのだと知った時、夢ではないかと思ったほどだ。

逞たくましい腕に抱きしめられると、天にも昇る心地がした。

初めての恋に、私は周りが見えなくなるほどに溺れていた。ずっと一緒にいられたらと、どんどん好きな気持ちは大きくなっていった。

それから三ヶ月。